



同精神薬は使わないが、漢方薬やハーブ、鍼灸などを補助的に用いて心の症状を和らげることはある。

とんどない。

40代の男性Aさんは、半年ほど前から内海医師のところで治療を続けていた。受診のきっかけは気分が沈む、眠れない、体がだるいといった症状だった。

「通勤に片道2時間かかるため、朝は5時に起き

る。通常は「強迫神経症」と診断され、抗うつ薬を処方されるケースだ。

「現代人の抱える症状は、仕事や家庭、借金など、社会的な問題が引き金になつてゐるわけですから、そこと向かい合うのが先決で薬では解決できません」（内海医師）

は何が原因でどうしたら解決できるか、ある程度わかつていることが多い。そうだからでも対策を一緒に考え後押ししてくれることを望む。患者個にある非や原因を指摘すると「やはり、そういうのですよね」と納得する。ある意味で、親や教師の代わりもあるわけだ。ちな

結果の出やすい睡眠薬や向精神薬に頼る治療をすることは、容易に想像がつく。もちろん薬のすべてが悪いわけではないが、安易な投薬が多くの悲劇を生んでいる事実が今、明らかになりつつある。精神科医療の投薬治療の問題については、次号で紹介する。

牛久東洋医学クリニック
（茨城県牛久市）院長の内海聰医師は、その精神医療の落とし穴にはまり、立ちゆかなくなつた患者約200人にセカンドオピニオンを実施、治療を行つている。そこで直面したのが精神医療の矛盾だった。・
「本来の精神科は、統合失调症や大うつ病といった重い精神疾患を診るところで、薬を使わないと命にかかる人がいて、初めて投薬が検討される。ところが今は、人間関係がうまくいかない、仕事にやる気が起きない、失恋したなど、誰でも経験するようなことをきっかけに心の不調を訴える人に対しても、精神科医

は簡単に「うつ病」と診断し、安易に向精神薬（抗うつ薬、抗不安薬など）を处方するケースが多いのです。薬の作用で重い精神疾患を引き起こす恐れがあるにもかかわらず、です。

内海流診療の極意

で残業し、深夜に帰宅。そんな長時間労働をすつと続けていました。性格的に内気なところがあつたため、誰にも相談できず、ずっとその状況に耐えていた。それが症状に現れたと考えられました。（内海医師）

不調を訴える
背景に、バー
トナーの暴力
(DV) があ
るケースも。
そういう場合
は、専門の團
体やシェルタ
ー、弁護士を

現代人の心の不調は
原因の分析が重要

不調を訴える背景に、パートナーの暴力（DV）があるケースも。そういう場合は、専門の団体やシェルターや弁護士を紹介する。女性が相手から離れて自立すると、症状は改善されるという。

みに台湾では、「体の病気は医者に、心の問題は易者にみてもらう」というそなが、これが案外、正解なのかもしれない。

診察室は広々としていて、いたってシンプル。内海龍郎はここでじっくり患者と向き合って心の症状を引き起こす原因を探っていく



問題だらけの精神医療Ⅰ 現代人のうつや不安は 抗うつ薬では治せない!?

今月から2回にわたり、山積する日本の精神医療の問題を取り上げる。第1回のテーマは「精神科の早期受診の弊害」。精神科がメンタルクリニックと名乗るようになったことで、かつてより気軽に受診できるようになった。しかし、それがかえって多くの弊害をもたらしていることをご存じだろうか。

10年で患者数2・4倍！異常な増加の意外な背景

ストレス社会が叫ばれて久しい昨今、一大社会問題となっているのが、うつ病など心の病気になる人の増加だ。2008年の患者調査（厚生労働省）によると、うつ病や躁うつ病などで医療機関を受診した人の数は約101万人、10年前の約2・4倍である。

心を病む人が増えた背景にはさまざまな理由があるが、そのなかには、国がうつ病の早期受診を促すキャンペーンを始めたことや、かつての「精神科」に代わって「メンタルクリニック」や「心療内科（精神面に起因する体の不調を診療する）」といった新たな名称が出現し、心の不調を診てもらうことへの抵抗感が薄れたことが挙げられる。

ちょっと気分がふさぐ、落ち込む、不安、眠れないといった症状があると、自ら心療内科などを探して受診する。そんな人は、確実に増えている。だが注意してほしいのは、その先に精神医療の深い落とし穴が待

いとうしゅんや・吉澤ジャーナリスト・等導演・国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。アレビ・雑誌・著書など、多数のメディアでより深い医療のあり方を追求・発信し続けている。<http://otowa-sho.ty>